

もし日本から牛乳が消えたら

東京都立瑞穂農芸高等学校 畜産科学科 2年 中野 寿美

私達人間の先祖は、古くから動物の猿だと言われています。しかし、私はそうは思いません。だとしたら本当の先祖は誰か。私達の本当の先祖はきっと牛です。

猿は進化する能力にすぐれ、地におり立ち秩序やルールを作り出し、そして社会を作りました。ですが、その社会が成り立つための「地」を作り出したのは牛です。荒れた地を耕しながら生きのび、草を糧に牛乳という宝を生み出し地に繁栄を与えてくれました。ですから、私は尊敬の意味もこめて牛を自分たちの祖先だと思っています。

牛は私達にとって非常に身近な生き物です。例えば小学校の中では沢山牛が登場します。生徒が背負っているランドセル。多くは牛革が使われています。音楽室に並ぶ楽器。その中の太鼓やティンパニなどの打楽器の打面も牛革です。勿論牛と言えば牛乳。毎日の給食に出されていますし、食パンについてくるバターも牛乳で作られています。一年一度のクリスマスメニューでは、生クリームたっぷりのケーキ、真っ白なシチュー、どれも牛乳由来の食品が机の上で輝いています。

最近では女性にとっても牛が大切な存在となってきました。前記のような牛革が女性のファッションの中で人気を得ています。牛革バッグ、牛革財布、牛革靴など、街ゆく女性の多くが牛革の製品を身につけています。ファッションだけでなく、化粧品にも牛は進出しています。牛乳の乳脂が入った石けんや乳液やリップクリームなど、多くの化粧品に牛乳の成分が入っており、薬局などで「ミルク」の文字を目にしたことは少なくないでしょう。牛乳からチーズを作る際に出る乳清も、本来は加工がしにくく周りの嗜好性の低さから捨てられていましたが、その乳清が近年では化粧品などに活かされています。

このように牛は特に衣、食の面で必要不可欠な存在です。私は朝目覚めると、先程紹介した乳脂の入った石けんで洗顔をします。朝食はいつも紅茶に牛乳を入れて自分でミルクティーを作って飲みます。私はパンやケーキなどのお菓子が大好きです。ミルクティーのように自分で作ることもあります。お菓子作りにおいても牛乳はかかせない存在です。ですが、作る時に牛乳を切らしてしまい、水で代用して作ったことがありました。出来たお菓子はまずくはありませんでしたが、口に入れてすぐに違和感が感じられるほどでした。こうして十年と少し生きてきて、私は無意識に牛乳に囲まれ牛の恩恵を受けて育ってきたことを今この作文を書きながら再確認しました。

人が生きていくには食物が必要です。人が生きていく世の中には、畜産という生業が必要です。私はその畜産が知りたくて、いつまでもただの消費者でいるのではなく一瞬でも生産者の立場になって自分の目で畜産を見つめなければならないと物心がついた時には

思っていました。今まで身近だった牛が、学校で酪農を学んでさらに身近になり、私はある問題を意識し始めるようになりました。それは酪農家の高齢化と減少についてです。

今日本は酪農家だけでなく、農家も激しい衰退に襲われています。農業を営む人の平均年齢は65歳以上と言われています。「平均年齢65歳」ならまだしも「平均年齢65歳以上」という現状は驚きを隠せません。そんな問題がはびこっている中、ある仮定が頭に浮かび上がりました。「もし日本から牛乳が消えたら」という仮定です。

日本から牛乳が消えてしまったら人々は代替りのものをさがし、それを作って繁栄させようと考えましょう。しかし、牛乳は唯一無二の存在と言えます。インターネットで牛乳、代用と検索してみると水、豆乳、粉ミルク、練乳などが候補にあがっていました。前者はともかく、後者は元々牛乳を原材料としたものです。牛乳がないのに牛乳からできているものを代替りにするとは本末転倒です。中でも豆乳は牛乳と同じく栄養が沢山含まれており、実際に代用されています。しかし、決定的なデメリットが二つあります。一つは飲みすぎると体に悪影響があることです。豆乳に含まれる大豆イソフラボンは摂取しすぎると、女性ホルモンのバランスを乱したり、甲状腺機能、骨粗しょう症などを引き起こすおそれがあると言われています。もう一つは豆乳があまり加工に向かないということです。豆乳も牛乳と同じようにチーズやヨーグルトへ加工することはできます。とはいえ多くの問題が立ちます。まず豆乳と牛乳には風味の違いがあり好まない人も多いです。そして全ての加工が豆乳にできるわけではありません。牛乳を固めて白カビの発生によってできるカマンベールチーズは、豆乳を代用して作る場合、白カビとの相性が悪いのでうまく出来あがりません。このような様々な問題から牛乳の代替りを見つけるのは簡単にはいかないでしょう。もし食卓から牛乳が消えたら、それはどんなに貧しく悲しいものなのか、想像するだけで気持ちが落ち込んできました。

この現状を脱却するにはどうすれば良いか。それはこれからの日本を担ってゆく若者、つまり私のような高校生が考えなければいけない課題です。私は全ての人々が消費者であると同時に生産者でいてほしい、と願っています。先述のように、人が生きていく上で必要な「生産すること」は誰もが味わうべき大切なことです。自分が毎日口に入れているものはどのようにしてできているのか知るべきであり、消費するだけでなく生産をして国を豊かにしようという気持ちを実現すべきです。昔の人々は畑を耕し、鶏をひよこから育てて卵を作り、最後に殺して命を頂いて生きてきました。それが誰もが知っていた日常であり、生命の営みだったのです。時は流れ、今の時代では誰がどのようにして作ったかわからない野菜や肉を食べ、牛乳を飲んで暮らしている人がほとんどです。社会が変わっていくうちに、農業における消費者と生産者はきっぱりと分かれ、「生産すること」を知らない、忘れてしまった若者が蔓延っています。にも関わらずそんな若者達がこの課題を背負っているのです。

ですが希望は大いにあります。それは、「生産すること」を知っていてその素晴らしさを知っている若者、私達農業高校生です。私と同じで酪農を学ぶ人は、「牛が好きだから」「将来酪農家になりたいから」といった小さな気持ちから大きな気持ちまでを理由に酪農を学んでいます。そんな純粋な気持ちは誰もが一度は持ったことがあるはずです。「牛乳を自分の手で搾ってみたい」「牛乳はどうやって作られているのか」そんな好奇心や疑問をそのまま終わらせず、私達が引き出し、広げていくことができれば生産の輪も広がり、今の日本に豊かさが戻るかもしれません。

今の私は酪農を学びながらその手伝いをさせてもらっている、言わば生産者見習いです。そんな消費者と生産者の中間である私は、きっと農業や酪農への興味はあっても知識はない、そんな人の味方になれるはずです。

昔の友人や家族にいつも聞かれます。「今日は沢山牛乳搾れたの」「子牛はいつ産まれるの」そんな何気ない質問ですが、答えを待っている相手の目はきらきらと輝いています。本当は多くの人が牛の素晴らしさをわかっています。それをもっと表に出し、行動に出せるよう、私は牛と酪農の素晴らしさを世に広めます。とても小さなことですが、ちりも積もれば山となる、牛乳の可能性と素晴らしさを伝え、牛乳の需要を上げれば、自ずと酪農家について見つめ直されるはずです。

日本で牛乳がさらに愛され、牛が消えることなく人と共に健やかに暮らせるように、酪農家が憧れの職業になるように、そんな思いで私は今日も牛乳を搾り続けます。
